

敢えて,わざと,意図的に



作・にゃこ
絵・ちよいもず

敢えて,わざと,意図的に サンプル

~積極お漏らし短編集~



車の行手に畑地の拡がりが見えてきたとき、もう一度、掌を彼女の膝に押当てた。そして、その掌を膝の間に割込ませ、腿をつつむようにして左右に揺すぶったとき、彼の掌には濡れた布の感触があった。自分の掌が、瀬川紀子の異常な嗜好を感じ取っている、と彼はおもった。そういう形で挑戦されている、とさえ考えた。彼はふたたび身構え、わざと無頼な口調をつくって、言ってみた。

「おや、おめえ、しょんべんしたな」

掌の下、腿の筋肉がにわかに強ばり、彼女の口から細い声が出た。

「違うわ、違うわ……」

◆ サンプル目次 ◆

・ウォータースライダー	……	4
・嬉しゅん訓練	……	9
・逆トレマスターへの道	……	13
・株式トレーダーの排泄事情	……	18
・デニムショーパン切迫性尿失禁の悩み	……	20
・野ション姿がSNSで晒されてしまった子	……	23
・サンセットビーチ	……	26
・匂い	……	29
・おしゅ娘鼎談会	……	32
・露出放尿趣味持ちの痴態	……	36

ウォーター 슬라이ダー

命に関わる暑さ。スマートフォンで天気アプリを開くと、今日も猛暑日らしい。もう何日続いているのか、私にはもう分からない。エアコンの設定温度は二十六度になっているけど、うまく冷えてくれない。フィルター掃除しなきゃだめなのかな。でも、そんな気にもなれない、うだるような酷暑。

私と恋人の陸斗くんは、休日にもかかわらず、どこかに出かける気力もなく、部屋でだらだらと過ごしていた。

不要不急の外出など、こちらから願い下げだ。

「おれ、白の水着もいいと思うんだよね。どう思う？ 琳」

なんとなくスマホをいじっていた陸斗くんが、私に話しかけてきた。

は？ 何を言ってるのこいつは。このスケベ。

私は、間を置かずに出そうになった言葉を、すんでの所で飲み込んだ。

「やだ無理。そんな目立つやつ着たくないよー！」

なるべく言葉を選んで、やわらかく拒絶しようとしたのに、これ以上ないくらいストレートに拒否している台詞が口をついて出た。

「似合うと思うけどなあ。こういうフリルが付いたやつとかさ」

陸斗くんは、スマホの画面を私に見せてくる。興味ないような風を装って画面を覗くと、セパレートタイプの白水着を着用したモデルさんが、眩しい笑顔を見せていた。

次いで、陸斗くんを一瞥する。彼が気持ち悪い顔をしているように見えるのは、私の反射的な拒絶心の表れなのだろうか。恋人の言っている事を、素直に受け入れられない。

『この夏、視線を集める白に挑戦してみませんか？』

視線を集めるから嫌だって言ってるのに、この記事を書いたライターは分かっているなと思う。華やかさはある程度求めても、華美なものとは分不相応なのではないだろうかと考えてしまう。

「だって白ってなんか下着みたいじゃん。だめだよ恥ずかしい」

「確かに、シンプルなタイプなのはそう見えるかもしれないけど、こういう長めのパレオを合わせたやつなんかは水着らしく見えるよ。

ほら、こういうのとか」

画面を再度見ると、シャーリングが可愛い、オフショルダーでセパレートタイプの水着が表示されていた。アンダーショーツ付きでパレオも巻くから、透けはなさそう。白にもかかわらず、ほどこいこなれ感を持っていた。

「ちよつと借りてもいい？」

私はそう言つて、陸斗くんからスマホを受け取った。

商品ページを下へとスクロールさせ、詳細を確認する。

シーズンも終わりに近づき、値段は安い。

『コスパがいい。お気に入りです』

『水着に着られている感じがしない』

『アンダーショーツも生地がしっかりしていて、安心です』

購入者の評価は総じて高かった。

『どうよ？　悪くないでしょ』

陸斗くんの視線が訴えかけてくる。

渋っているお客に即座に代案を示し、売上につなげる営業マンのように巧妙だと思うのは、惚れた弱みから、なのかな……。

『まあ、これなら……？』

私はいくつかの商品を比較し、陸斗くんのリクエストに応じる事にしたのだった。

『よっしゃ！　今年はなかなか行く機会がなかったけど、新しい水着を買うなら行こう！』

『まだ学校は夏休み中だよ。レジャープールとかすごく混んでるよ？　きつと』

『ある程度混んでるからこそ、夏感があるんじゃない。それとも、琳は海がいい？』

そうか。大勢の水着客の中に紛れ込んでしまえば、さほど目立つ事もないかな。二人が付き合い始めて最初の夏だし、思い出作りにもいいかも。

『うーん、海よりもプールがいいかな……。海水ってこう、べたつくし、砂も厄介だからね』

本当は人口密度的な意味で、私はプールの方を選んだ。混み具合なら、海よりもプールが混んでいて安心感が得られると思つての事。

海水が粘つくのも事実ではあるし。

『よし、プールで決定ね。次の日曜なら空いてるけど、どう？』

『うん、いいよ。……っていうか、水着を買う前に予定から決めちゃうって、どうなのよ。行き当たりばったり過ぎない？』

『確かに。ちよつと待って、今買うから。えっと、サイズはこれいい？』

『うん』

普段、服の買い物に付き合ってもらう事が多かったから、陸斗くんは私の着る物のサイズは把握している。

『よし、と。買ったよ。明後日には到着するみたいだし、日曜には間に合いそうだね』

明後日なら、プールに行く前に試着もできそうだった。

嬉しそうな表情を浮かべて話す陸斗くんを見て、私はプールが楽しみになってきた。元々泳ぐのは嫌いではなかった、というのもある。もつとも、芋を洗うような混み具合で、プールに入れても、立っている事しかできないかも知れないけれど。

◇ ◇ ◇

日曜日。

私と陸斗くんは、車で一時間ほどの所にある、レジャープールに来ていた。結構名前は知れていて、あまりの混み具合を聞いてからは、決して近寄るまいと心に決めていた場所だった。それなのに、

今私がいるのは、噂に違わず、人いきれで息が詰まりそうな所だった。人の心というものは、ひとところに留まらず、移り変わって行くものなんだな、などと考えた。木を隠すなら森の中、白い水着は混雑の中。

案の定、プールの中もすごい人混みで、普通に泳ぐのは不可能だったけれど、水浴びと割り切れれば気持ちのいいものだった。

気になっていた人の視線も、さほど感じる事はなかった。白水着も悪くはないのかも。

「あのスライダー、でつか……。落差何メートルあるんだよ」

流れるプールに浮かびながら、陸斗くんが指さした先には、大きな構造物があった。ウォータースライダーだ。

「あんな大きい、滑った事ないよ。くねくねしてて酔っちゃいそう」

巨大なチューブ型のウォータースライダーで、高さや滑り降りる長さがギネス記録に登録されているとか。そう、施設のサイトには書かれていたっけ。ちょうど、人間の小腸のように曲がりくねった半円状のチューブの中を通り、プールへと吐き出される人の様子は、なんとも表現しにくい印象を私に与えた。だってねえ……人が消化されたう○ちみたいに出てくるんだもの。

二人で浮き輪型になったボートに乗り込み、滑っていく形になるように、絶叫を伴って、次々と流れ落ちて来るのが見えた。

「面白そう、乗ってみたい？」

「すごい行列作ってるよ？ 最後尾があそこで、階段を登って滑る

所まであんなに長い列になってる……」

「どれくらい待つんだろう？ とりあえず近くまで行ってみようよ」

「うん……。でも、あまりにも待つようなら、諦めよう？」

ウォータースライダーに近づくにつれ、酷い混雑なのが分かってきた。四列になった待ち行列が、配置されているカラーコーンに従って、つづら折りになっていた。

「当アトラクションは、現在大変混み合っております！ ただいま、約一時間待ちとなっております！」

まさに長蛇の列で、最後尾には待ち時間が書かれたプラカードを持つスタッフがいて、別のスタッフは、大声を出して待ち行列を誘導していた。

「一時間待ちって。陸斗くん、本気で待つつもり？」

雑談でもしながら、まったりと待てれば、意外と早く乗れるのかもしれない。でも、今の私には、簡単には承諾できない訳があった。

下腹部がじんわりとした重みを持っていたから。出口がむずむずしていたのだ。ほんのりとしたお腹の疼き。

おしっこしたい、かも……。

「話し相手がいたら、すぐに自分達の番が来ると思うけど？ 子供連れの家族で並んだりするのは大変かもだけど、自分達は二人だけな訳だし」

「そう、かな……。とにかく早く順番が回ってきて欲しい……」
ぶるっ。

長時間プールに浸かっていたせいか、私の身体は冷え切っていた。でもその時は、灼熱の太陽が照りつける中にいたから、じきに温まってくるかと樂觀視していた。そうなれば、おしっこも意識しなくても済むようになるかもしれない。

おおよそ三十分後。

「うーん、なかなか進まないなあ」

「そうだね……。ねえ、この調子だといつ乗れるか分からないし、諦めよっか」

少しいらいらとした感じになってきた陸斗くん。私は生理現象の事もあったし、並び続ける事に対する抵抗が強くなってきていた。おしっこがどんどん溜まってきている気がする。身体の冷えも、簡単には改善してくれそうにはなかった。

「でも、折角新しい水着で遊びにきたんだもん、もうちょつとくらい待てない？」

「そうだけど……」

陸斗くんに気取られないよう、内ももに力を入れる。

尿意を意識し始めると、落ち着かなくなってしまう。トイレの待ち行列の規模とは訳が違うのだ。延々と続く、人の頭、頭、頭。

「今折り返し点くらいでしょ？ やつとここまで来たんだからさ」

「そ、そうだね。気長に待つとしますか」

下腹部の疼きを懸念しながらも、私は陸斗くんの提案に付き合う事にした。

しかし、私はだんだんじつとしていられなくなり、密かに脚を擦り合わせたり、足を踏み換えたりしていた。パンプスなどと違って、ビーチサンダルは音がそんなにしないから、気付かれる様子は見られなかったのが、幸いといえば幸いだった。

欲求はどんどん強くなり、耐え難いまでになって、私を苛む。

プールの中にいる時に、何度もこっそりおしっこをしていたせいか、出口が緩みやすくなっているのかも知れない。

もう、無理だ。

右脚に絡ませるように左脚をピッタリと密着させ、今か今かと待ち構えている出口のひくつきを意識する。

おしっここの滴が股間から真下に垂れ落ちないように、脚に沿って流れ落ちるように……。

一気に緩めず、少しずつ、少しずつ……。

びゅるっ。

……………あつ。

ああ……………っ。

出てる……。

思いっきり出口を弛緩させて、完全放尿の快楽に浸りたい欲求と闘いながら、ちびちびとおしっこを出し続ける。プールの中では、ほんのりと温かなおしっこの感覚が、少しの背徳感とすっきりしていく解放感を得て、えも言われぬ気持ちよさがあったのに、今はもどかしい気分……。

全部一気に出したい気持ちに負けそうになる。

溜まるスピードよりも出ていくスピードが早ければ、やがては楽になるはず……。

白い水着、彼に懇願されて着てきたけど、股間の色が変わっているかも。バレないかひやひやしていたが、怒涛の尿意の前にはひれ伏すしかない。

パレオを巻いていると言っても、下から見上げれば股間の様子は見てとれるだろうし、不安感があつた。

やっぱり白の水着は、下着姿を晒しているような気分になる。人前で下着一枚になって、おしっこを漏らしているような気持ちになる……。

しょうろろ……。

もう、かなり出たはずなのに、尿意は衰えを知らない。膀胱は、空っぽになるまで収縮をやめようとしめない。

お願い、もう少し、手加減して……。

じよろっ……、じよろろ……。

いつまでも出てきてしまう。

「あー！ 前の女の人、おしっこしてるー！」

遠慮のない子供が、私の様子に変な事に気付いて、叫び出したりしないだろうか。

時折聞こえてくる絶叫が、私に向けられてのものではないかと感じ、ぎよっとする。

居たたまれない気持ち湧いてくるけど、おしっこが溢れてくるのをどうしようもできない。

ウォータースライダーは、階段を登りながら行列を形成するため、目と股間との距離がどうしても近くなる。他人の何気ない目線が私の股間に来るのだ。その時、流れる液体に不自然さを感じられたら——

つーんとした下腹部の疼きは収まることなく、私を責め立てる。

内ももを伝い、ふくらはぎへと流れるおしっこ。ピーチサンダルのぬるく粘ついた、おしっこ独特の感覚。

「おお、あと少しで乗れるね」

「そ、そうね。楽しみ……っ」

出口を通り抜ける尿流から我に返り、私は陸斗くんに戻事を返した。出口の関門は、なんとか緊張を取り戻したようで、尿意は小康状態となった。油断は禁物だったけれど……。

列はかなり進み、あと十分程度で乗れそうな所まできた。

屋外のアトラクションのため、強烈な日光が私の皮膚を焼く。さつきまで濡れていた身体が、今ではカラカラに乾いている。

私は、今しがた出したおしっこが乾いて、周囲に匂いが漂っているんじゃないかと不安になった。そよ風が吹いた時に、股間から嗅ぎ慣れた匂いが立ち上ってくるのが分かるから……。ちようど、トイレでおしっこを済ませている時に鼻腔をくすぐるあの匂いだ。隣の陸斗くんにも言われそう。股間の変色があつたら更に恥ずかしい……。前を押え気味にして出しちゃったから、パレオにも薄黄色いおしっこの跡が移っている気がした。

——続きは製品版でお楽しみください！

嬉しゅん訓練

なんかいいことないかなあ。私はトイレの個室でおしっこをしなから考えていた。最近はずいてない事ばかりで、気が滅入ってしまふ。ちよつとでもいい事があれば、心を健康に保っていられると思うんだけどな。何か、いい方法はないのかな。

……いけない、ちよつとトイレにこもりすぎていたかも。待っている人はいなかったけど、早く席に戻らないと、サボりかと思われてしまう。トイレトベーパーでさつと股間を拭い、下着を上げる。急いだから、ちよつと拭きが甘かったかも……。洗面所の鏡でさつと身だしなみを整えると、私はトイレを後にした。

今日は仕事に集中できない日だ。本日中に提出しなければいけない資料の作成も遅れている。問い合わせメールにも迅速に返信しないといけないし、現場からの部材の発注依頼も、急ぎだと言われている。

どうしていつも、もうなくなりそうになってから発注してくれって言ってくるんだろう。もう少し在庫に気を配って作業してくれたら、こつちにしわ寄せがくる事もないだろうに。

うちの会社の事務職は、なんでもこなす必要があるから、バタバタした毎日を送っている。今日は残業確定だ……。人に気取られ

ないように、こつそり溜息をつく。ただ、今日は金曜日。金曜日をやり過ごす事ができれば、土日は休日だ。あと少し頑張ってみましようか。



終わった。今日という一日をなんとか倒せた。物事に追われ、あつという間に時間が過ぎていた。言われていた資料は夕方にはなんとか提出し、上司の承認は得られたし、溜め込んでいたタスクもなんとか処理できた。残っている業務はあるけど、なにも今日どういてもやらないといけない訳じゃない。今日できない事はどうしても無理。残業もいつまでもダラダラやっている訳にはいかないし。最近では会社がうるさくて、残業を多くしてしまうと、目を光らせている上司や総務から、うるさく注意されてしまう。下っ端だからね、はいはいって言っているしかないんだよね。

昼間思っていた事を思い出す。なんかいい事ないかなあ……。

良い事って、例えば嬉しい事かなあ。寝て起きて仕事してお風呂に入って寝る。嬉しい事ってないな。嬉しい事は、明日への、明日以降への活力なんだけど。嬉しい事に恵まれている人が羨ましい。どうやって生活していたら、そんなに嬉しい事に会えるのかな。

犬って『嬉しい』をよく表現するよね。尻尾を振って、飛び跳ねて、ぐるぐる回って。ご主人がいない時間は本当に暇かもしれないけど、ご飯！ お散歩！ 構ってくれる！ こういう時に嬉しさが

爆発しているように見える。そういえば、嬉しんってするよね、犬は。ネットで検索すると、嬉しん対策の記事で埋まっているのを見るくらいだから、犬の世界ではわりと普通なんだろうな。

人間って嬉しんしないよね。実は私、幼い頃は嬉しん体質だった。とても嬉しい事があると、急におしっこがしたくなる。慌てて力を入れていたから、犬みたく漏らしちゃう事はなかったけど。出してしまえば、紛れもない嬉しんだった。歳を重ねるうちに、そういった反応はいつの間になくなった。

あれって何だったんだらう。『嬉しん 人間』検索。うーん、やっぱり出てくるのはペットの悩みについてばかり。私の体質が特殊だったのかな。嬉しい事や、びっくりする事があると、括約筋が弛みそうになる……？ そんな事も書かれていた気がするけど、本当かな。

自分は、嬉しんは確かに存在する、そう実体験から言えるけど……。お仲間さんっていないのかな。自分だけ特殊な人間で、まかり間違えば嬉しん癖が抜けないままで成長してしまった？ ちょっとだけ情報があった。嬉しい事、びっくりする事で失禁。もしかしたら、若い時は感受性が豊かで、そういう刺激に弱い所があるのかも知れないな。

嬉しい事はおろか、嬉しんも存在しないのかー。寂しいな。

豊かな感受性の持ち主には嬉しさが宿るのだとすれば、その感受性を取り戻せばいいのかな。そうすれば幸せに人生送れるのかな。小さい事でも喜べるようになっていたいな。自分で見つけ出してささや

かな幸せを得るよう、練習したほうがいいのかも。

ついでと言ったらなんだけど、嬉しん体質も取り戻したくなってきた。あれ、気持ちよかったな。幸せな気分が胸がいっぱいになった時に、おしっこしたくなるの。幸せがおしっこになってあふれ出そうになる感覚。

嬉しん訓練、やりますか。嬉しんは動物しかしないという常識を覆したい。些細な事でも、良かったな、嬉しいなってなった時、たまたまおしっこがしたければ、おしっこをする。それを繰り返していけば、条件反射が生まれられないかな。小さな頃は嬉しんしたくなっても、それを止める事ができたから、失禁しちゃうことはないと思う。仮に嬉しん体質になってしまったとしても。

とりあえず、嬉しいを探すよう、心がけよう、嬉しくない、絶対に嬉しんはできないからね。中々見つからない時に、不意に嬉しいが来るかもしれないから、おしっこする回数は、なるべく減らしたほうがいいのかも。

『嬉しい事がありました！ おめでとー、私！ やったね、おトイレ行こつと。……ふう、溜まってたから、ちよつとやばかったかも？ はあ、お腹が軽くなつていくし、ちよつと幸せだし。これを繰り返していくんだね、私』

想像してみた私は、結構楽しそうだった。

嬉しん訓練、始めました。ラーメン屋さんの冷やし中華みたい

に、貼り出しちゃう？ というのは冗談だけど。浮ついた心で考えていたのが、現実に取り戻される。はあ、家事

練

訓

ん

よ

し

嬉

するかー。ご飯は簡単なものでいいや。毎日簡単クッキングしている気がするけど。一汁三菜なんて言うけれど、そんなの不可能だね。一人暮らしで実践している人、少なくとも私、知らない。

夕ご飯は結局冷凍ピザにした。やる気、ください。ちまちまと口に運びつつ、スマホを眺めていると、「三万名様プレゼント！ このアカウントをフォロー、拡散するだけで抽選に参加できます」これが目飛び込んできた。

「フォローに『このアカウント、PRの拡散しかしいな』なんて思われたくない。でもプレゼントには応募したい。そういう思いでこのアカウントは運用を開始しました」というアカウントを開いて、フォロー、次いで拡散。拡散しても誰もいないけど……。数秒後、結果が送られてきた。

当たりだった。

やった！ 当たりそうで当たらないけど今日は当たった！ 明日、早速もらいに行こう。そこまで考えて、さっきまで夢想していた事を思いだした。嬉しい？ それとも嬉しくない？ 嬉しい……です。で、なんだっけ。えっと、トイレに行っておしっこするんだっけ。

うーん、今出るか微妙……。

トイレに入って、便座に腰掛け、体をリラックス。尿意がほんのり強くなって、その感覚が微妙に移動していくのをイメージした。膀胱から出ますよサインが来て、おしっここの道が広がっていつて、出口から出るとき、ちよつと爽快感があるやつを。

なかなか出てきてくれない。最初から躓いているようでは、先が

思いやられる。十分。十分粘ろう。

持ち込んだスマホを見ながら、本当に粘った。そろそろ粘り時間が終わりそうという時に、待っていた感じが来た。したい、ちよつとだけだっけ。でも出る気がしない。うーん、腹圧で押し出せばなんとか……？

お腹に力を入れて、息んでみた。膀胱が押されているんだと思う。お腹の中から感じる尿意の場所が変わったから。力が足りないのかな。んっ、もう少し強く……。

来るかな？ 来るかな？ んー……。あ……きたきた。そう、このまま庄で。あ、尿道におしっこが入った。これは出るやつ。

ふー、出た。ほんの少しだったから、なんの音もしない。ちよつと滲み出る所が、おちびりにちよつと似ているかも。まあ、最初はこんなものでしょ。

寝るまでまだ時間があるし、水分補給しようかな。今の時間なら、摂りすぎて夜目が覚めてしまう事もないだろうし。

箱買いしてある麦茶を一つ取り出して、全部飲んだ。これで五〇〇cc。こんな時間から何らかの驚きがある気がしないけど、驚きは、時を選ばないので……。

お風呂にゆっくり浸かって、上がる頃には、おしっこが溜まり始めているのが分かった。私は長風呂が好きで、半身浴をよくする。ぼけーっとして、お湯のぬくもりが全身に広がっていくと、一日が終わったと感じる。

スマホが震えた。メールが届いたみたい。件名を見ると、『抽選結

果のお知らせ』とある。あーそっか、今日だっけ。ああ今日だわ。ライブの当選発表。ファンクラブじゃなくて、一般での応募だったから期待はしていない。いなかったのだけど。思わず二度見したよね。にわかには信じられなかった。チケット難民続出って言われていたのに。一ヶ所しか応募していなかったのに。

なんと当選。

うれしめでいっぱいになった。流石に。有給取る、どんなに忙しくても取る、適当な理由をでっち上げてでも取る。

やったあー……。最高じゃない！

丁度おしっこしたかった所だし、良い事って重なるもんだよね。

「はあー、当たっちゃった……。マジかよ。やば」

お隣さんに聞こえてたかも。ちよっと、眩きじゃない独り言が出た。おしっこと一緒に。嬉しい。

——続きは製品版でお楽しみください！

逆トレマスターへの道

神奈と別れた後、紗緒は一人、ドラッグストアに足を運んだ。目的はおむつ売り場だ。神奈と行った店舗とは違ったが、コンビニと同じで、どの店も商品の配置は似通っていたため、売り場を見つけるのは容易かった。

紗緒は、おむつの商品展開の多様さに、改めて驚かされた。対象年齢や吸収量ごとに対応した商品が置かれて、どれを選べいいのか咄嗟には判断できない。紗緒は圧倒されて、その場で立ち尽くしていた。

「お客様、何かお探でしょうか？ もしよろしければ、お話を伺います」

紗緒は、びくつとして声の聞こえた方向に視線を向けた。相当長い間、売り場で固まっていたようだ。なんと答えたらいいいのか、すぐには反応できない。

「あの、その……家族が夜尿症で困っていて、おむつを買ってくるよう、お使いを頼まれたんです」

少しの沈黙の後、紗緒の口からは、思いもよらない言葉が紡ぎ出された。

「ご家族様の年齢をお教えいただいてもよろしいでしょうか」

「じゅ、十九歳です」

「では、大人用のおむつになりますね。適応サイズは、パッケージにウエストサイズの目安が書かれていますから、ご参考にされるといいですよ」

「ありがとうございます」

「夜尿という事でしたら、吸収量の多い商品を選ばれると思います」

「そうなんです……。種類が沢山ありすぎて、どれにすればいいか、分からなかったんです」

「そうですか。夜尿といつても、一度で済む場合もあれば、二度漏らしてしまう場合がありますので、三、四回分の吸収力があれば、いいと思います」

紗緒は店員の説明を聞きながら、商品を順に見ていった。吸収量の目安を確認すると、七回というのもあった。一回を一五〇ccとして、と但し書きがある。合計すると、一リットル程の吸収量という計算になる。大は小を兼ねるということわざが、紗緒の頭に浮かんだ。

「えっと、もつと吸収できる品物もあるみたいです」

「あります。それは、介護用として用いられる事が多いですね。おむつの交換が、頻繁にできない場合に選ばれます」

自分の場合、どの程度の吸収量が適切なのか、紗緒には分からなかった。家族が夜尿症というの、口から出任せだったのだ。尿意を感じた時、どれだけの量のおしっこが出るのかも分からない。

「これにします。吸収量が多いと、より安心して眠れる気がしますから」

「なるほど、分かりました。このおむつは、パンツのように穿いて使用するものです。ご家族の方が、不自由なく日常生活をお過ごしのでしたら、この商品でもよろしいかと」

「はい、問題ないと思います。ありがとうございます」

沙緒は店員に礼を言うと、七回吸収のおむつのパッケージを手にした。会計を済ませ、足早に自宅へと向かう。半ば、衝動的におむつを買ってしまった、今になってどきどきしていた。今日は、両親が仕事で遅くなる事は聞いていたから、家族にばれてしまう事はないだろう。姉は想像上の家族であり、存在しない。

◇ ◇ ◇

『神奈、わたしね。昨日、おむつ買った』

『えっ……』

いつもの通話。その中でいきなり飛び出した、沙緒の爆弾発言。全く予期していなかった沙緒の告白に、神奈は反応に詰まった。

どうして、という気持ちの心の中に渦巻いているようだ。

『それでね？　してみたんだよ、おしっこ』

『ええ……。どうしちゃったの？　沙緒……』

神奈は、頭の中が何故でいつぱいになり、それを言葉という形であふれ出させたい。理由が分からない、おむつは沙緒には必

要のないもののはず。脳みそがショートして、受けた衝撃を処理できない様子。

『神奈が現在進行形で困っている事、どんな風なのか、自分でも体験してみようと思って』

『そんなわざわざ……。そこまでやらなくてもよくない……？』

『気になっちゃって。付き合ってる相手の悩みだから』

『でも』

『駄目かな』

『だめとか、そういうのじゃなくて』

『好きな人が困ってることに、私は実体験に基づいて共感したい。そう思ったの』

『無茶だよ。沙緒、やめようよ』

神奈の言葉には、真剣さがあつた。彼女がどれだけ日常生活で苦労をしているか。沙緒を説得しなければならないという、強い思いが滲み出ていた。

『なんだっけ、……切迫性尿失禁？　なっちゃってもいいやつて』

沙緒は、おむつに出したおしっこが、考えていたものとは全く異なる感覚を得る事を知った。それは不快なものではなく、不思議な解放感を伴うものだったのだ。放尿という行為自体、快感をもたらすものだ。それが意に沿わぬものであったとしても、おしっこ自体は気持ちが良いのではないか。自分の意志に反して出てしまうおしっことは、どのようなものだろうか。沙緒の心は、危うい領域に足を踏み入れようとしていた。探求した先にあるはずの、神奈が

感じているであろう、昏い快楽を求めている自分がいる……。

『……え、そんなの良くない！ 沙緒にまで嫌な事味わわせたくない！ それはそれは辛いものなんだから……』

『辛さを知るのも、寄り添ってたいって気持ちからなんだけだな』

『もう、どうなったって私は助けられないよ？ 第一、どうやらこんな身体になるのか、私には分からないし！』

沙緒には言い出すと聞かない所があった。神奈はこれ以上、説得する事を諦めたようだった。

『確かに原因はよく分からないね……。分からないから、体験できないかもしれない』

『その方が、絶対にいい』

『そだね。ふわあ……。もう夜も遅くなったし、そろそろ寝ようかな』

『うん。朝は冷え込むし、暖かくしてね』

『そうする。おやすみ、神奈』

『沙緒。できれば、考え直して欲しい』

『ありがとう、神奈。気を遣ってくれてうれしい』

『後悔だけはして欲しくないから』

『大丈夫。心配してくれる気持ちだけで十分だよ』

『おやすみなさい』

沙緒は、神奈が通話を切ったのを確認してから、スマホから手を離した。神奈には、尿失禁する原因が分からないから、体験できるかどうか分からないと言った。だが沙緒は、あるキーワードをネットで見かけていた。『逆トイレトレーニング』、略して『逆トレ』

とも呼ばれている。おねしょをしてしまう身体になるため、または、無意識におしっこを漏らしてしまう体質になるためのトレーニングらしい。これを実行すれば、過活動膀胱と言われる状態になるかもしれない。

過活動膀胱。それは、急に我慢できないほどの強い尿意をもよおし、時にはトイレに間に合わず、失禁してしまう事もある症状の事だ。

◆ ◆ ◆

厳寒の季節、冬がやってきた。頬に感じる風は、冷たいを通り越して、頬を刺すようだ。街ゆく人は皆早足で、早く暖かい空気の中で、ひと息つきたいと思っているように見えた。

神奈は切迫性尿失禁でのトラブルを、おむつに頼る事で回避していた。心理的な余裕が生まれたのか、トイレを目の前にしておしっこを漏らしてしまう頻度も減っているように、沙緒には感じられた。しかし、おむつを外して生活してみると、元に戻ってしまうらしく、神奈にとっては、ままならない状態は続いていた。

沙緒はというと、できる限り、おむつを付けた生活が続けていた。極力トイレは使わず、おむつの中におしっこを出す。尿意を感じたら、すぐにおしっこをする事を心がけて過ごしていた。

おむつの付け初めは、尿意が強くても、うまく排尿する事ができなかったが、慣れてくるに従って、抵抗なく放尿できるようになっ

てきていた。学校ではおむつを穿いていなかったため、おしっこがしたくなった時に、つい無意識に出そうとしてしまい、慌てて出口を締める事が多くなっていた。

沙緒は、自分のおむつ生活について、神奈に話す事を控えていた。

神奈は沙緒の行動をあまり良く思っていないようで、おしっここの話題になるのは、神奈の膀胱事情がほとんどだった。密かに、沙緒の膀胱は、おしっこを溜める事が苦手なように、変化しつつあった。

時はあつという間に過ぎていき、年の瀬に差し掛かっていた。やがて学校では終業式を終え、冬休みが始まった。

冬休み期間、トイレでおしっこを済ますのを禁止する事を、沙緒は心の中で決めていた。常時おむつを着用し、尿意を感じた時は全ておむつの中へと放出する。

それだけでなく、日常生活を普通に送る中で、おしっこをするための時間を持たないという目標を持った。おしっこがしたくなくなったらすぐに出す。用事があれば、それらをこなしながら、自然におしっこを出していけるようにする。

様々な姿勢で放尿する事に慣れるのが重要だと、沙緒は考えた。

- ・ 立っておしっこ
- ・ 座っておしっこ
- ・ 仰向けでおしっこ
- ・ うつ伏せでおしっこ

・ 歩きながらおしっこ

・ 物を済ませながらおしっこ

立っておしっこするのは、もう何度もしているから、もう慣れていた。問題はないだろう。座ってのおしっこも、問題ない。最初は出しにくかったけれど、トイレに座って尿意を解放するトレーニングを繰り返した結果、椅子に座った状態でも、自然におしっこできるように なっていた。

なかなかできないでいたのが、仰向けでのおしっこだった。かなり膀胱におしっこが溜まり、尿意を強く感じるまでになっても、仰向けになると、幾分か尿意が引いてしまう。

沙緒は、多めの水分を摂って、より強い尿意を感じるようになってから、仰向けになり、放尿できるように練習した。尿意には波がある。強くなったり、一時的に弱くなったりを繰り返し、徐々におしっこがしたくて堪らなくなっていく。

仰向けになつていても強い波が引かない状態になった時、出口を弛緩させる事を意識し、全身の力を抜いた。そして下腹部を凹ませ、膀胱を収縮させるよう促すと、おしっこが尿道に流れ込む感じを得た。

そのまま括約筋に力を入れず、収縮しようとする膀胱を放置すると、ちよろちよろではあったが、尿道を流れていくおしっこを感じ取る事ができた。力が入ってしまったわないう、意識的に出口を開放していると、尿流は徐々に力強さを増して、おむつがそれを受け

止めた。訓練を繰り返した結果、仰向けでの放尿も、難なくできるようになった。

うつ伏せでのおしっこは、比較的やりやすかった。うつ伏せになると膀胱が圧迫されるため、立ったり座ったりしている状態よりも、強い尿意を感じるからだ。弛みがちな括約筋は、簡単におしっこを通過させた。

歩きながらのおしっこは、難易度が高かった。限界に近い尿意を感じていても、歩いていると、何故か波が引いていく。

沙緒は、腹圧でおしっこを押し出すよう意識しながら、歩くことにした。徐々に力を入れていくと、出口がじんじんと疼くようになっていく。おしっこが出そうになり、更にお腹に力を入れる。すると、歩行するリズムに合わせて、おしっこがぴゅっぴゅと尿道を通過し、おむつに吸収されていた。

——続きは製品版でお楽しみください！

株式トレーダーの排他事情

さてと、今日を始めるとしようか。

夫を送り出してからが、私の仕事のはじまり。日本の資本主義社会の中枢、東京株式市場。それが私の戦場だ。東京証券取引所が取引に使われる場所で、稼働日はカレンダーオフイス通りとなっている。基本は週休二日制だ。

株式の取引を始めとする資産運用で得られる所得は不労所得と言われる。不動産の家賃収入などと同じカテゴリに属する。その他、動画投稿サイトに自分が作ったコンテンツをアップし、再生回数に応じた収入を得るのも、不労所得に含まれる。

私の取引スタイルには、細かな売買を繰り返して利ざやを積み重ねていくというものと、中長期保有で株価の上昇に期待するものがある。前者は、短期間での株価の変動に依存したものだ。短期売買で取引する銘柄は、活発に取引されているものに限られる。人気のない銘柄は値動きが少ないため、値幅に期待が持てない。長期的に見て、株価の上昇が見込めると判断した場合は、細かな売買を繰り返したりはせずに保有して、毎日の終値をチェックするくらい。高配当が期待できたり、株主優待に魅力を感じたりする場合も、長期保有して、権利を獲得する。権利日というのが株式にはある。銘

柄それぞれに設定されている権利日を、株式を保有したまま取引終了まで持ち続ける事で、配当権利や優待権利を獲得することができる。

毎日PCのモニターにかじりつき、ザラ場と呼ばれる日中の取引時間中は、減多な事では席を外さない。例外は、食事の宅配サービスくらい。取引時間は前場と後場と呼ばれ、前場は午前九時から午前十一時三十分まで、後場は午後十二時三十分から午後十五時三十分までとなっている。前場と後場の間であれば、離席できる。ネット通販で購入した商品は、取引時間中に届かないよう、時間指定をかけている。

取引開始まで、まだ時間が残っている。私は購読している、大日本経済新聞のウェブ版に目を通す。大抵の記事は大した価値のないものばかり。市場の値動きについての記事も、後付けの適当な理由。こんなことを書いて金になる記者という職業、面白いのかと思う。

株価が下がった時は、景気の先行きに不安感が広がったからだと書かれる。株価が上がった時は、景気の先行きに安心感が広がったと書かれる。私は辛抱強く、記事の内容を吟味していく。提灯記事や飛ばし記事の中にも金鉱脈が埋まっているかもしれない。新聞は、独自の取材の他に、企業や政府などが新聞社に流した情報によって記事が作られるが、それを読んで投資家がどう思うか、その意を問うために観測気球を上げて確認するメディアでもある。真偽を見定め、その情報に乗るか、見送るか。記事が出た銘柄は、株価が大きく変動する場合がある。その変動幅を利益に替えるのが、私の仕事の一つ。

スマホのアラームが鳴った。そろそろ取引時間が始まる。私は取引ツールをクリックして立ち上げた。前日に取引されていた株価の表示が消えていく。今日の値動きを刻み始める前のひととき。私はこの時間、新たに淹れた、熱いエスプレッソを口に運びながらモニターを眺める。導入したエスプレッソマシンは、いい仕事をしてくれる。

課金している経済専門チャンネルから聞こえてくる声に耳を傾けながら、SNSをチェックする。有力な情報を投稿するアカウントを厳選しており、次々と更新されていく。幾ら勝ったの負けただの、そういうものは目に入れない。わざわざ勝利を報告する人間がいるか。どうせ、勝った時には嬉々として投稿するが、負けた時は口をつぐむ人間ばかりだ。淡々と、正確な情報を流すアカウントにだけ目を向けていればいい。

あと数分で取引が始まる。決算報告、経営方針、新商品の発表、不祥事の発覚、色んな材料で株価は変動する。事前に流された情報は、取引開始直後から値動きに影響する場合が多いから、一番神経を使う時間帯だ。集中力を研ぎ澄ませ、何枚もあるモニター上に目を行き来させる。あと十秒ほどで世界がその姿を現す。

その時、私は自分の身体に違和感を覚えた。下腹部からの信号が、それを尿意によるものと伝えてくる。なにもこんな時間にしたくならなくても。取引開始まで、あと五秒。株価は秒未満の単位で変動するため、正確な時間を把握するのは、相場参加者の義務だ。あと二秒。一旦意識に上ると駄目だ、尿意が気になって仕方がない。

取引が始まった。モニターに数字がずらっと並び、目まぐるしく変わっていく。事前にピックアップしておいた銘柄をチェックしながら、日経平均株価という、市場全体の指標となる数値のチェックも欠かせない。株価が大きく変動した銘柄は、即座にSNSに投稿される。同時に、視聴している経済チャンネルでも、株価動向を実況しているのを聞く。為替相場の変動も見なければならぬ。大きく値動きのあった銘柄は、同業種の株価にも即座に影響する。取引時間を場中と呼ぶが、株価が変動する場中でも、ニュースの奔流は止まらない。ぴっくりする値動きが始まってしばらくすると、ニュースが出ているという理由が出て来たりする。

多忙を極める一日の始まりだ。こういう毎日を送って、やっと思いで手にした利益が不労所得らしい。富裕層などが、有り余る資産を人任せで運用しているのとは違う。自分のお金は自分が生み出さないとならない。一秒が命運を分ける世界。そういう場所なのに、おしっこがしたい。

——続きは製品版でお楽しみください！

デニムショーパン切迫性尿失禁の悩み

私はデニム生地が好き。ジーンズでもショートパンツでも、それは変わらない。デニム以外のボトムスも持つてはいるし、スカートもズボンも穿くけど、いまいちテンションが上がらないというか。デニム生地が一番しっくりくる。

ジーンズは、穿き込めば味が出てくるのもいいし、穿き心地も好き。形は普通のストレートをよく選んで穿く。トップスを選ばず、色んなものが合わせられるのも楽しくていい。SSでもAWでも、オールシーズン使える所が、ジーンズが好きで良かったと思える所だ。色んな色の持ち合わせがあるから、その日の気分を選んでいる。ライトブルー、インディゴ、ブルー、ホワイト、グレー、ブラック……。よく選ぶのは、グレーとインディゴかな。

ショーツも好きで、よく穿く。最初は部屋の中でしか使っていなかったけど、太ももを出すのが流行り始めた時に、思い切って外にも穿いて出かけるようになった。ちよつと攻めすぎかも、と思うような丈のものでも穿く。海水浴場でよく見かけるような感じのアイテムで、ちよつぱりセクシーなやつ。

街を歩いている人は少ない感じだけど、全く見ないという訳ではないので、今では普通に穿ける。デート中の女の子が身につけてい

るのをよくちょく目にしていたので、男の子の受けもいいんじゃないかな。私は、自分が好きだから穿いているだけだけど。部屋にいた時はくつろいでいたいから、ショーツは手放せない。デニムだと、ちよつとお尻がきついかと思った時は、ドルフィンパンツを穿く事もある。

ジーンズ、ショーツ共に、穿き込みが浅めなものを好んで穿く。ハイウエストなアイテムを身に着けている人が多いんだけど、好きなんだから仕方がない。丈が短めのTシャツを合わせると、素肌が見えすぎる事もあるけど、そういうファッションが絶滅した訳でもないの、外に出歩く時でも、割とそんな恰好はする。お腹が出てくるとすぐに周りにバレてしまうから、体型には気を配ってないとダメだけどね。

ところで……。

私には人には言えない趣味がある。いわゆる裏の趣味、性癖ってやつなんだけど。それは、おしっこしたいのに、それをあえて我慢する事と、着衣のままでおしっこをしようとする。意外とありがちな趣味でしょう？ 世の中にはもっとコアな人達がいると思うから、まだまだ若輩者です。おしっこ我慢、いわゆるおしこがま行でも、着衣放尿も、様々な性癖の中で、その歪みの度合いを数字にできるとすれば、そんなにびつくりするような値にはならないんじゃないかな。

家族と過ごしている時は、なかなか実行するタイミングがなくて、悶々とする日が多かった。証拠隠滅の為の後片づけの問題が一つ。

あととは事後の洗濯物をどうするかだ。どうしてもおしっこしたい欲求の波に勝てない時はあって、危険を冒してしまった場合の対処には頭を悩ませてた――

「食事、洗濯、掃除。全部毎日こなしているお母さんはすごいよ」

私、お嫁さんになれる気がしないもん」

私は、お母さんを捕まえて、それとなく話しかけた。家事のうち、洗濯を自分の役割にしたい。

「自分がやらなきゃ家が回らないんだもの、仕方がないと思ってやっているわ。誰かに手伝ってもらえたら、って思う時もちろんあるわよ？」

「だよね。ごめんね、お母さん」

誰も、喜んで日々の家事をこなしてはいない。私から言い出せば、洗濯は簡単に任せてくれそうだった。

「真希、私ね？ 今はお仕事をしていないから家事をこなせるけど、ずっと家の中で日々過ごしていると、外に出たいなって思う時もあるのよね」

「お仕事したいってこと？」

「そうね。結婚する前は私も普通に働いてたし、老後の事を考えると、やっぱりお金はある程度蓄えがないとって考えるのよ」

「深刻な高齢化社会って言われてるし、社会保障もともに受けられるか、先が読めないよね」

「そうなのよ。年金一つ取っても、本当にあてにしていなくてもいい

ものかって不安になるわよね。あなた達若者なんて、もっと大変だと思うけど……」

お母さんは、憐憫の目で私を見てきた。私は当時、まだ高校生。社会人がどれだけ大変なのか、身をもって体感していた訳ではなかった。

「ピンとこないけどね。まだ先の話だし。お母さんが外に出たいなら、私、少しずつお手伝いする」

「あら、そんなこと言い出すなんて珍しいわね」

「そう？ そんなに薄情でもないつもりなんだけど……。とりあえず、家族の洗濯は任せて。私がやるから」

「あら、本当。それなら助かるわあ」

楽勝だった。お母さんが、元々手助けが欲しいと思っていたのなら、なおさら簡単だった。今まで何故、手伝いをしていなかったのかと突っ込まれると、言い返す言葉が見つからないけどね。

「さすがに任せっきりに出来ないよ。将来は自分もすることになるのは間違いないんだし」

「それもそうね。じゃあ、お願いできるかしら」

「うん。任せてよ、お母さん」

「ありがとう、真希」

「ああ、あと全然関係ないんだけどさー。お父さん、勝手に部屋に入ってきてるっぽいの、注意しといてよ」

不意について家族に自室に入られる問題も、この際解決しておきたかった。

「えっ、そうなの？」

「そう。なんかね、私がつてる漫画とか小説とか、借りていつて
るみたいなの」

「初耳だわ……。借りるなら借りるで、一言欲しいわよねえ」

お母さんも、いい歳した娘のプライバシーは守りたいだろう。私の
主張に大きく頷いていた。

「そうだよ。言ってくれたらいくらでも貸すからって伝えといて。
とにかく、私が部屋にいない時は入らないでって」

「ちょっと強めに言っておくわ。女の子のお部屋に侵入するなんて、
ちょっと放っておけない」

「入る前にノックして、というのをお願いね」

「分かった。帰ってきたら、早速言つて聞かせるわ」

「ありがと、お母さん。よろしくね」

——お母さんとういうやり取りをしたつて。

洗濯物は自分が担当して、洗濯機を操作する人間を私に限定する
こと。それと、私がいらない時間に部屋に入られることによって、違和
感を覚えさせないようにすること。後者は部屋でおしっこをしよ
うと思った場合に、必須な項目だ。匂いが残ったり、予想外の場所
を濡らしてしまつたりした時に、処理が必要だからだ。

窓を開けて換気するであるとか、消臭剤を撒くであるとか。ラグ
を濡らしてしまう時もあるのが厄介で、跡と匂いが残らないよう
しっかりと対処しないといけない。自分がいらない時の部屋への入室

を禁止し、ノックをされた時は今手が離せないと言い訳すれば、秘
密を守ることができる。でも、あまり頻繁にすると怪しまれること
になるから、我慢しないといけない時があつて、早く自由が欲しい
と思つていた。

そんなこんなで、制約のある中でも性癖に正直な生活を送つてき
たけれど、一人で暮らすようになってからは、もつと素直に生きら
れるようになった。自由に性癖を満たせる環境にいるというのは、
本当に気分がいい。暇があつてもなかったとしても、性癖に費やす
時間を捻り出そうとするのは、良くないかもしれないけどね。

性癖を満足する場所は、自宅に限られている。主に部屋を使つた
り、手軽に満たしたい時はお風呂場やトイレを使つたりする。お風
呂場でおしっこをするのは完全に習慣化しているので、水場で催す
ことが多く、台所や洗面所でも急に尿意が来ることがままある。

変な気分の時は、その急な尿意に逆らう事を途中でやめてしまふ。
止めようとする身体の状態反射に待ったをかけちゃう。

「やつぱり出そう？　ここで……。折角したくなつたんだし」

そう、心の中で自分の身体に言い聞かせながら、括約筋を弛めて
いく。すると、一旦引つ込もうとした尿意が、にわかに勢いを取り
戻していく。その時に、独特の疼きが来るのだけど、うまい表現が
見つからない。感覚的なものを言葉にするのは難しいなつて思う。

——続きは製品版でお楽しみください！

野ション姿がSNSで晒されてしまった子

夜は寝付きにくい日が多い。あれこれと考えてしまい、目が冴えてしまう。うじうじしても仕方ない事が、頭に思い浮かぶ。過去の思い出したくない失敗の数々が連想的に脳裏をよぎる。嫌な記憶というものは、なかなか忘れ去る事ができない。昨日のこのような、鮮明に頭に残っていて、羞恥で消え去りたいという衝動に駆られる。早くこの夜を終わらせたくて、処方量を超えた睡眠導入剤を口に運んでしまう。薬に慢性的に頼っているためか、耐性が身体に形成されていて、効いている気がしない。明日も学校があるからもう寝ないといけないのに。焦りが生じると、更に眠気が遠ざかっていく。

寢床で悶々としているうちに、いらいらが募り、結局起き出すことが増えた。そして、外をふらふらと歩き回る習慣ができた。誰との関わりも生じない、独りの時間。

深夜でも営業しているコンビニエンスストア。帰りが遅くなった勤め人。一匹でひとところに留まっている猫。青点滅から赤に変わる、歩行者用信号機。なんという事もない光景を見ていると、不思議と心が晴れてくるのを感じる。決められた道順を辿らず、きまぐれで選んだ道を歩く。普段、心に留めない風景でも、ささやかな発

見があるものだ。

あてどなく夜の住宅街を彷徨っていると、やがて、じんわりとした変化が現れる。日常を送る中で、周期的に訪れる、ありふれた現象。生きている限り、絶えることなく繰り返される感覚。はじまりは、軽い違和感がある。

きたきた。

自販機の前で足を止め、飲み物を選ぶ。缶ジュースのプルタブを開け、時折口を付ける。ふう、と息をついて、しばらくその場にたずむ。今はもう、眠気は感じられない。今夜は眠れないかもしれない。じわり、じわりと増してくる、軽い疼きをそのままに、私は徘徊を再開した。

天候は晴れているようだったが、歩く道は暗かった。さっきまであった家々の明かりは、今はめっきりと少なくなっていた。住民達は、ほとんどが、床に就いた頃合なのだろう。風景の変化が乏しく感じられるようになってきた。閑静な住宅街では、自動車の走行音も、滅多に聞こえてこない。虫が鳴く季節でもないし、無だ。しーん、という音が聞こえるような、そうでないような。規則正しく聞こえる自分の足音だけが、確かに鼓膜を震わせている。

交差点にさしかかる度、でたらめな道を選んで歩き続ける。帰る時に道に迷う心配はない。スマートフォンのマップアプリを立ち上げて、ナビゲーションに従うだけで、自宅に戻る事ができる。今、帰るつもりは全くない。なるようにしかならない、という思いだけが、私を歩かせていた。

歩行のリズムに合わせて、身体の重心が移動する。かつ、かつ、かつ、かつ。そのうち靴音に合わせてるように、違和感にも強弱が現れ始めた。じん、じん、じん、じん。この変化はいつもの事。何度も経験し、慣れてしまった感覚だ。徐々に、気分が上向きになってきた。

しばらくして、見通しのいい場所にきた。右手には住宅は建っておらず、街灯の薄い明かりがぼつぼつと並んでいる。どうやら、ここは公園らしかった。公園か。ふと、トイレに清掃中の看板を出して、二人の女性が話していたのを思い出す。夏の事だった。

「もう、男子トイレの臭い、なんとかならないのかしら。ただでさえ蒸し暑いのに、おしっここのきつい臭いはするし、床は濡れていたりするし。なんでこんなに使い方が汚いのかしらね」

唐突に思いだしたのは、いま感じている尿意に原因があるのだろう。公園、公園といえはトイレ。トイレといえはおしっこを済ませる場所。探してみようかな、トイレ。馴染みの薄い、男のピクトグラムが掲げられている場所。どうせ今なら、誰も見ていない。珍しく私の中に、好奇心が芽生えた。こっそり入って、確かめてみよう。服用している薬が気分を曖昧にさせているのか、禁止されている行為だという認識は薄かった。

点々と灯っている明かりを頼りに、公園内を歩いて行く。夜の学校のようなものだろうか。昼間のがやがやとした賑わいとの落差が激しく、本当に自分は一人なんだという事を意識させる。心細い。トイレ、トイレはどこだろう。確かめたら、すぐに戻ろう。積極性

に欠ける、本来の自分が顔を覗かせそうになる。

恐る恐る、公園を奥へと進んでいくと、小屋のような建物が見えてきた。これがトイレかもしれない。近づくと、男女のピクトグラムがあるのが見えた。間違いなくトイレだ。引き寄せられるように、男子トイレの中へと入った。

途端に空気が変わった。きつく濃縮された、饅えたおしっこの臭いが鼻をつく。臭いの元はどこだろう。広いとは言えない室内を歩く。臭いは段々強くなってきた。あれは、小便器だろうか。男性がおしっこを済ませる所。スマートフォンを取り出し、明かりを付けると、小便器がはつきりと見えるようになった。黄色くくすんでいるのが目に入り、おしっこがこびりついているように思えた。みんな、ここにおしっこしてるんだ。みんなが繰り返しおしっこして、凝縮された臭いって、凄い。男性の性器も、似た臭いがあるのかな。いけない、こんなの嗅いでると、私もおしっこしたくなっちゃう。抱えていた疼きが、急に強くなる。今すぐに済ませたくなくなってきた。もうおしっこ出ちやいそう。

シャワーを浴びる時、尿意が生じて、自然におしっこが出る。トイレじゃない場所でも、繰り返し放尿しているうちに、体がトイレだと認識する。元々、トイレはおしっこをする場所だ。トイレに行くと必ずおしっこを出すから、そんなに強くなかった尿意でも、出したいという気持ちは高まる。私の体は、トイレの男女の区別がないのだろう。だから今、おしっこ減茶苦茶したい。

お風呂場で立ったままおしっこをすると、股間から出た液体は、

そのまま真下に落ちていく。だから、自分の前にある小便器を狙って出せる気がしない。どうやったら前に飛ばせるんだろう。

——続きは製品版でお楽しみください！

サンセットビーチ

それから二人で生ビールを頼み、焼き蛤を堪能した。醤油が焦げる匂いが私の食欲を大いに刺激し、実際、頬が落ちそうなくらい美味しくて、何杯もビールをお代わりした。

ジョッキを片手に外を見ると、水着女子が大勢いた。浜辺で水をかけあつて嬌声を上げていたり、ビーチに寝そべって、オイルでてかてかの肢体を惜しげもなく晒していたり。眩しかったのは、太陽だけではなかった。

女の私から見ても、女の子が水着姿ではしゃぐ姿は、なんだかとても愛らしい。大事な人がいるのにも関わらず、視線が私の制御を離れてしまうのは、許してほしい。こういう風に、鈴美を客観的にずっと見ていられると、もつといいのと思った。

「みんな、生き生きしているよね。なっちゃんたら、ずーっと目が追いかけてるんだもん」

「私にはさすがにいるから。色んな女の子見て、比較しちゃった」

「ふーん。たのしい?」

「楽しい。今のところ、ずずは全勝、無敗だよ。誇らしい気分」

私は人間観察が好きというのもある。恋人が自分と離れている時、どんな表情をするのか……。自然体の鈴美も見てみたかった。

その鈴美はというと、俯いて、太ももの上に握りしめた手を置いていた。時折、その握った手に力が入っているのが分かる。浅く腰掛けていて、何か、今までの話題とは関係のない事に思考をさらわれているような感じがした。

「ずず……酔っ払っちゃった?」

「ううん、そうじゃないけど……」

落着かない様子で座り直し、ぐつと堪えているような様子。

「なんか考え事してるみたいにも見えるよ?」

「……わたし、トイレに行きたくなってきちゃった」

鈴美はそう言うと、身体を小刻みに揺らし始めた。私が気付かなかっただけで、ちよつと前から揺れていたのかもしれない。パツと見て分かる動きをするということは、強めの尿意があるのかも。

「トイレはちよつと歩いた所にあるみたい。案内板があったよ。私も行こうかな」

身体が海水で冷やされていた所に、生ビールを何杯も飲んでいたら、私もおしっこはしたいなと思っていたけど、言い出せずにいた。

「でもさあ、こういう所のトイレって、なんていうか汚いよね。和式であちこち飛び散ってたり、この暑さだと匂いもきつかったりしそう」

「確かに」

「こんなに人がいっぱいいるのに、トイレに向かう人ってあまり見かけないよね。不思議だよ」

「うんうん」

「……もうひと泳ぎ、してこよっか」

「……そうだね、行こう」

私は鈴美の提案を受け入れた。言葉の裏に含まれている、分かりますい真意に従おうと決めた。

実を言うと、浮き輪を浮かべて遊んでいる時から、そういう誘惑に駆られてはいた。みんな、何も言わずに楽しそうに遊んでいるけど、おしっこしたくならないのかな。実はみんな、こっそり海にしちゃってるのかな。そういう風に。

「あつっ！ 熱い！」

鈴美は飛び跳ねるように海へと向かっていった。彼女が言っている通り、砂浜は太陽の熱を蓄え、裸足では歩けないくらいの温度だった。でも、ひよこひよことしたぎこちない歩き方は、おしっこ我慢のせい……？ と、勘ぐってしまう。

そんな鈴美の様子を見てみると、私まで誘われてしまいそうになる。したいな、程度に思っていた尿意が、急に高まってきてしまった。

「ほんと、すっごく熱い！」

私も鈴美のように、歩みがおかしくなってしまうていた。内またを擦り合わせるようにして歩くと、ゆつくりとしか歩けなくて、そうすると、砂浜の熱さでやけどしそうになってしまいそう。

「ふふ、なっちゃんたら、そんなに我慢できないの？」

普通に歩けないくらいの熱と、せめぎ立ててくる強い尿意で、私

は時折立ち止まって足踏みをしていたから……。だけど、鈴美も人の事よりまず自分の心配をすべきでは？ そう思った。

「ずくに言われたくないな、んつ、二人とも同じでしょう？」

「ごめーん、意地悪言つて。あ、やば、歩き出してから急にきちゃつて」

「動き出すまで、こんなにしたいとは思ってなかったよ……」

「ほんとそれ。下手したら今すぐにでも……」

「一刻も早く」

「海へ」

私達は人目も構わず、前かがみになって海を目指した。時折強い尿意の波が押し寄せて、その場から動けなくなつた時は、お互いに相手が動き出すのを待つことになり、一層焦りが募るのだった。

あつ、いけない……。

浜辺に着いた時、もう少しで楽になれると思った瞬間、出口がじゅわっと温かくなってしまうた。

「~~~~」

動くと、もつと出ちやいそう、もう無理……。

出口がひくんひくんと蠢き、膀胱の中身を押し出そうとしてきて、限界が近い。

「はあ、はあ、もう少し歩けば海なのに……なっちゃん、わたし、駄目かも」

鈴美もSOSを伝えてきた。諦め混じりの声を聞くと、私まで折れてしまいそう……。

「すずう……私も、もう動けない」

私は内またを擦り合わせ、出口から溢れださせまいと指を深くまで押し当て、屈伸運動までしている。誰がどう見ても、おしっこを限界我慢している姿。

鈴美は、その場でしゃがみこんでしまっていて、身体をぶるぶると震わせている。おしりの辺りをよく見ると、ピンクの水着の色が変わって見えた。

——続きは製品版でお楽しみください！

匂い

い
今真冬って事は、南半球は真夏って事だよ。夏、いいなあ。絶海の孤島とかに旅行して、甘々いちやいちやの日々を過ごしたい。何度も交わって、愛液とおしっこと精液と汗の混じった液体をお掃除して、また交わって、くたくたになって、そのまま寝落ちしたい。

冬に花を咲かせるボロニアの甘くフルーティーな香りも好きだけれど、夏のおちんちんの匂いには勝てないと思う。冬場は匂い成分が蒸散されにくいから、夏の匂いの方が当然印象に残る。受粉を目的に放たれる花の芳香は、性行為を連想させて卑猥だとは思うけど、人間は結局おちんちんの匂いに戻ってくるんだ……。

あだし、明善寺さくら。

おちんちんをティスティングするのが大好きだ。ワインが、酸化するに伴って、味が変化していく感じを楽しむように。蒸れ蒸れになったおちんちんの匂いを心ゆくまで嗅いで、その感想をおちんちんの持ち主に伝えたり、ゆつくりと舐め上げて、おしっこや汗の芳醇な味を堪能したりするのがやめられないのだ。

純粋な、熟成されたおしっこの匂いが超好み。汗の匂いと混じり合って、甘くて息苦しくなるような香気を放つ、下着やおちんちん

にも目がないけど。デート帰りに彼氏に頼み込んで、使用済みのパンツをお土産にねだる事もあるくらい。目的は、当然その日のおかずとして使うため。変態だよ。自分でも分かっている。

私には、兄の使用済みボクサーパンツを鼻に押し当て、匂いを嗅ぎながらオナニーをしている所を目撃された闇歴史を持っている。兄はサッカーをやっていたから、汗の匂いがすごかった。パンツを顔の上に乗せたままだったから視界が奪われていたし、ちん嗅ぎドM女の音声作品をノイキャン機能のあるイヤホンで聞いていたから、ドアのノックの音が全く聞こえなかったのが敗因。あの時のばつの悪さは、今までの人生で、一番のものだっただろう。

「まあ性癖なんて十人十色、人の数だけあるんだし、あまり言わないけど……。兄の下着で興奮するのかよ、とは思っちゃうよな」
兄は、あたしに欲情して襲いかかってくるでもなく、呆れた様子であたしの痴態を見下ろしながら、評論してきた。こういう場で、ひたすら冷静な態度を取られるのが、一番堪える事を、兄はよく分かっていたんだと思う。

「べつ、別にお兄ちゃんのだから好きって訳じゃないんだからねっ！」
「だったら、なんでそんな事するんだよ……。好きでもない男の下着になって、なんで興奮できるんだ？」

「に、匂いが、その……好きだから」

「誰のでもいいって事なのかよ……しかも匂いって。……それ、ちよつと淫らじゃね？ 女が下着フェチなのかよ……。ド変態じゃん」
「そう……。自分でも淫らだなあって思うの。この香り、絶対フェ

ロモン臭なんだってば」

「お前の趣味を否定はしないけど、それ、墓場まで持っていく事になる性癖かもしれないぞ。悪い事は言わないから、自分の中にこっそりしまい込んでおくのがいいと思うぞ」

兄には内緒だけど、今でも洗濯かごの中を漁って、見つけたパンツを鼻に押し当ててしまう事がしばしばある。自分でも懲りてないなと思うけど、あの強烈なおしっこ臭を嗅いでしまったら、もう駄目だ。男は女の使用済み下着に精液をかけるっていう変態もいるらしいけど、私は匂いを嗅ぐだけで、下着を自分のあそこに擦りつけるなんて事はしないから、まだマシな方でしょ？ ……両手をフリーにして遊ぶために、頭に被る事はあるけど。

◆ ◆ ◆

兄には、墓場まで持っていく事になるかもしれないと言われた性癖だけど、勇気を出して、今付き合ってる彼氏、伸也にもカミングアウトした。彼氏の方から、あたしの事が好きだって告白されて付き合い始めたから、ちよっとくらい変な趣味を持っていたても、受け入れてくれるという自信があったから。

「エロ漫画じゃ、そういうジャンルが確立されてるよね。女の子が性器の匂いに酔う姿を、ひたすら描いているやつ。男の欲望だけで描かれた作品だと思っていたけど」

「実際好きな女の子は実在すると思うよ？ 自分からは恥ずかしく

て言わないだけで。匂いって脳に残りやすい情報らしいから、記憶から消えにくいみたいなんだよね。好きな人の匂いなら好きって人なら、もつといっぱいいると思うな」

「二次元の描写だと、匂いを嗅いでいるうちに発情して自分が抑えられなくなってる、思わず股間をまさぐるシーンなんか出てくるけど、さくらかもしかして、そういう事したいの……？」

「……うん、したい。見せ槍されてるのをくくんしながら、くちゅくちゅしてる所を見下ろされたい。匂いの魔力は凄いんだから」
「そうなんだ。言われてみると、髪の毛の残った枕とか、ボディソープや香水の匂いの残ったシャツって、そこにさくらかが居たんだって分かるからか、身体が反応してる事、おれにもあるんだよね」

「伸也って、ちん嗅ぎ漫画でしこしこした事、ある……？」

「……実を言うと、ある。なんていうか、オーブンに発情している女の子に魅力を感じるから」

「そうなの？ あたし達、相性よさそうじゃん」

あたしの目論見通り、彼氏は私の性癖を引いたりせずに、味わってみようという気になってくれた。そうなってくると、俄然、性欲が高まってくる。触らなくても湿ってきているのが分かつちゃう。伸也も、ころろなしか、股間が膨らんでいるように見える。ちよっと、苦しそう。

「伸也……あたし、したくなってきちゃった。ズボン、脱がせてもいい？」

声が上がっているのが自覚できるけど、自分のしたかった事を実

句

い

現できるという悦びがあつて、落ち着いている事などできなかった。

「うん、本当にシャワー浴びてないけど、いいの?」

「いい。絶対にそのほうがいい。無味無臭な交わりなんて、味気ないもの」

「じゃあ、脱がせて」

「うん」

あたしは、伸也が穿いていたカーゴパンツのボタンを外し、ジッパを下ろした。おちんちん、やつぱり固くなつてゐる。鼓動に合せて、とくつ……とくつ……と上_上下_下しているのが分かる。

「ピンピンになつてゐる。さっきの会話で興奮しちゃったのかな?」

「そうかもしれない。ジッパを開けてくれたから、楽になつた」
下着を見ると、おちんちんの先つちよのあたりが、じんわりと濡れていた。

「もう出てるじゃん、我慢汁。ちょっと嗅いでもいい? 下着越しに」

「うん……でも、くさくさでも引かないでね」

「絶対引かないよお。ドキドキしてて、息が苦しいくらいなんだから」

あたしは顔を、伸也のおちんちんを包む、下着の盛り上がり近づけていった。ズボンの中にこもっていた伸也の体温が、やんわりと感じられる。息が荒くなるのを止められない。

「ちょっつ、さくら、近いって……。鼻息がかかつて変な感覚」

至近距離まで顔を寄せると、あたしは下着越しのおちんちんに顔

をつけて、頬ずりしていた。衝動的にそうしていたようで、自分の行為に気付いたのは、頬に異物感があつてしばらく経ってからだった。下着は、ひんやりとした濡れ感があつた。カウパー、顔についてしまったみたい。

「んー。……すりすりしたら、一回り大きくなっちゃった」

「微妙な刺激がもどかしくて、気持ちいい。顔ズリなんて、された事ないから」

「後で、もつときもちくなるからね。嗅いでもいい?」

「うん……」

あたしは、おちんちんの先のあたりに、鼻先を密着させた。そして、肺が空っぽになるまで、息を吐いた。まるで、肺活量検査の前の、息を吐き切るやつみたい。

——続きは製品版でお楽しみください!

おしっ娘鼎談会

佳奈、亜紀、そして美優の三人は、佳奈の手配したカラオケボックスに集まっていた。防音がしっかりしているというのが、集まる場所として選んだ理由だ。もし会話が盛り上がって、声のトーンが上がってきたとき、話し声が他人の耳に届くのはよろしくない。個室居酒屋で集まるのはどうかという案もあったが、美優が未成年だという理由でそれは見送りとなった。

「そうだね、まずは自己紹介からいってみようか。みんな大体は知ってると思うけど、復習兼ねてもう一度って感じで」そう言って、黙りがちな空気を破ったのは佳奈だった。顔がいいだとか、大きな目が理知的だとか言われるが、本人は話半分に聞いている。「私は佳奈、二十三歳です。着衣のままでおしっこするのが趣味なんです。よろしくね」

佳奈は、最低限の文字数で自分の趣味を表現した。おしっこというワードも、日和る事なく自然に言った。

「ウチは亜紀。おしっこをもう無理つくくらいまで我慢しちゃうんだ。歳はね、二十一歳！　よろしく」

こういう場に慣れているのか、緊張で上ずった口調ではなく、囁くような小声でもなく、普段通りという雰囲気のアキ。同じ趣味の

仲間とリアルで話した経験があるのだろうか。垢抜けた感じの髪を手で梳きながら話すが癖らしい。

「わ、わたしは美優って言います。十七歳です。恥ずかしいんですけど、この歳になってもおむつが手放せません。か、かわいいですし……。趣味と実益を兼ねているんです。それに、冬場の寒さを和らげてくれるのがあるがたいというのがあります」

緊張気味に見えた美優は、最初こそ詰まっていたが、喋っていくうちに紡がれる言葉が加速していった。どこまで喋るのかと思われたが、紹介はそこまでだった。ふう、とひと息ついている様子。十七という事だが、見た目はもっと若い。黒目が大きいのも、幼めに見せている理由だろう。

「美優ちゃん、よろしくね！　私はおむつって経験ないんだけど、興味はあって、色々訊きたいって思ってたんだよ。質問攻めになっちゃったらごめんね？　先に謝っとく」

佳奈が緩やかに口角を上げて微笑む。

「あつ、はい……。わたしの話なんかでよければ、いくらでも質問してください」

「まあ私は着衣放尿の人間なのは変わらないと思うけど、知りたい事が多すぎて、今日が楽しみだったよ」

「ウチも限界我慢好きだから、たまにちびつちゃう事もある。ズボン濡らしちゃう訳だよ」

「はい」

「うんうん」

「そういう状況って、着衣放尿好きな部分と重なるよねって言いたくて」

「亜紀さんも、例えば濡れ感とか。そういうのが悪くないって思えるという事かな？」

佳奈は亜紀に、興味津々という風に問いかけた。事後の、着衣の濡れた感じも、佳奈は大切な感覚だと思い、味わっていた。

「ちびる程度は普通だし、我慢に失敗して漏らしちゃったとしても我慢の延長上にあるわけでしょ？　なら、それも楽しめるかもって」

「そうかも。私の趣味も、我慢という過程を通して出す事に繋がっていくから、おしがまフェチとは親戚みたいなものだよ」

亜紀は、おしがまというワードをさらりと出した。おしっこ趣味でなくても、言葉の意味を知っている人間は多いだろう。

「なるほど……」

美優は、佳奈と亜紀の話聞いて、深く相づちを打っている。二人と重なるフェチな部分がないか、考えているようだった。

「みゆちゃんも、きつと共通して楽しんでいるところがあると思う」
佳奈は、初めて会った相手であっても、早々に愛称呼びして自然に振る舞う事を心がけている。知り合って何年も経つ知己のように思わせて、相手の話の引き出しを増やしたいと考えているのだ。

「そうでしょうか」

美優は、思い当たる所が見つけれずにいるようだ。

「そうだなあ。おむつつて着衣の一部とは思わない？」

「ああ、そうですね。同じおむつでも、どうせ穿くならかわいいの

がいいって思いますから……。お洋服でも似合う服を着たいですし、佳奈さんのおつしやる事は頷けます」

「うんうん。かわいいって思ったおむつを着用して、おしっこをする」

「そう、そういう事になりますね」

「排泄をするだけの為におむつを使うんじゃないかなったら、それはもう、着衣放尿フェチと重なってる所なんだろう」

「複雑に絡み合っている世界なんだなあ、ほんと」

亜紀は、感嘆した声を上げた。我慢しておしっこを出す事だけに満足していた所に、手を出していなかった世界の話題が始まって、見識が広がっていきそうな状況にわくわくしているようだ。身を乗り出して、こくこくと頷いている。

「そうなんだよ。細分化された上に、重なっている部分もあって」

「限界我慢好きだって、服を汚さずに済ませたい人はおむつ使うからね。なんか具合良くなって、手放せなくなるって話も聞くよ」

「具合が良い」

「そう、なんかいいらしいんだよ。おむつにするのがいいんだって」

「みゆちゃん、そうなの？」

「えっと、おしっこすると、すっきりするじゃないですか。おむつだと気軽に出してしまえますし、その……気持ちがいいんですよ」

佳奈と亜紀が、ハッとして同時に美優を見た。好奇心が抑えられず、美優が口を開くの、耳をそばだてて聞く体勢だ。

気持ちいい。性癖の話題をしている時に出てくると、体が反応す

る言葉の一つかもしれない。おしっこという言葉がリアルではあまり聞かれないのと同様に、性的癖に気持ちいいというのも、現実世界では滅多に話す事はないだろう。

「どんな感覚なのか、もう少し知りたいな」

「やっぱりそう言っとこ、あったんだ。ウチも気になる」

「出始めると、おしっこ出る所からお尻にかけて、温かくなるんですけど、その感覚がいいんです。最初は出口だけが熱を持つんですが、だんだんその熱がお尻を包むように広がっていくのが実は……とても好きで……」

「やばい、めっちゃよさそう」

「夢見るような顔で言われると、だめ」

「えっ……。そんな風に見えてました……?」

「なんか、ここではないどこかにいましたね? 貴女」

「感覚を思い出し思い出し、溜息交じりに語ってる感じだった」

「恥ずかしいです……」

美優は上気させた顔を伏せた。右手を団扇にしてあおいでいる。話し始めると多弁になるけど、勢いがつき過ぎると我に返って、自分でブレーキを踏んでしまうみたいだ。

「みゆちゃんかわいい。元がいいから絵になるなあ」

「本当だよ? その顔面いらんならちようだいって思うもん」

「そうでしょうか……」

謙遜にしか聞こえないだろう。美優は五桁のフォロワーを抱えたアカウントを運用している。柄物のかわいらしいおむつに、キッズ

ファッションを合わせた投稿には、多くの反応が集まっている。奥ゆかしさを感じさせる口調からも、やさしい人柄を想像させる。人気の理由の一つなのは、間違いなさそうだから。

「こんな子がおむつして、女兒が着るような愛くるしい服を着て……」

刺激されちゃうよね、守ってあげたいって心が。お姉さんと一緒に住もうか」

「いやいやウチもどう? 美優なら全然OK! 『あんた、こんなかわいい子が同居人なの!』って言われて鼻高いやつやりたい!」

「あ、あ……、その、親と相談してみます……」

「ごめん、さすがに冗談だけだね。おしっこ趣味で意気投合して共同生活。夢だよね」

「そんなものなんでしょうか」

「私、自分で言うてしまうけど、歪んでいるからね。そういう出会いがないかって、どこかで望んでいる所がある」

「ずっと誰にも言えなくて抱えてる訳じゃん。まあウチは飲みに行った時に勢いでバラしちゃうそうだったけど」

「ふふ、そうなんだ。危ないね、亜紀ちゃん」

「ずっと落ちそうな橋、渡ってる気分かもね」

「特定されてしまったらどうしよう、という心配は常にありますよね」

「その時はその時って思ってる。怖いからやめるのかって言われたら、うーん、やっぱり止められない」

「止められる訳がない」

「もう、わたしの数少ない居場所です」
それぞれ思う所があったのだろうか。少し、誰も話し出さない時間があった。

——続きは製品版でお楽しみください！

露出放尿趣味持ちの痴態

月が満ちてくると、気持ちちが昂ぶってくる。そわそわと落ち着かず、月齢を調べると、ちょうど満月。そういう事を、私は何度も経験している。

澄んだ冬空に浮かぶ月は、美しさとか禍々しさを感じさせるものがある。ルナティックと言って、狂気を意味する語彙も月に由来しているし、私は月の満ち欠けに翻弄されて生きている。

満月か。衝動に駆られて、普段隠している自分の本性が露わになりそう。今宵のそれは、一際明るく私を照らし、誘い、急かしているように見えた。

ところで、私は日記を毎日つけている。というのは嘘で、触れた本が印象に残ったり、映画を鑑賞して面白く感じたり、おいしい料理を食べた時などにメモ書き程度に記録を残している。何もなかった一日の終わりに「何もなかった。」と書くのは無意味すぎるし、何の味気もない。

物思いに耽っている時の、自分の考え方の移り変わりを読み直せるのは、日記を書いていて面白いと感じる所だ。去年の今頃思っていた事が、百八十度変わった物の見方になっていたりして、当時の自分、おもしろ！ などと言った感慨を抱く。

心に深く刻まれた日の日記は、何度も読み返す。それこそ、日記帳の紙に癖がつくくらいに読み返す。しおりを挟むまでもなく、パッと開けるくらいになるまで読み返す。お坊さんがお経を上げる時に、経典を開く動作を短時間で行えるように、私も私の日記を素早く紐解ける。

いくつか癖のついた部分が私の日記帳にはあるけれど、読み直す度に当時の自分の心境や五感を、ありありと呼び覚ます事ができる記述が一ヶ所ある。

その内容は、自分の乗っている乗用車に、ガソリンを給油して帰ってくるという、単なる日常。それに、生理的で性的なスパイスをちりばめたものだった。

もう少しその詳細に触れる事にする――

私が目的地に設定したガソリンスタンドは、車で一時間ほどかかる。その道のりを、海外から取り寄せた利尿剤を服用して運転した日の、それは克明な記録だった。尿が膀胱に溜まっていくのを実感しながら運転を続けたのだが、やがて、急激な尿意に悶え苦しむ事になった。尿が漏れるか漏れないかの瀬戸際、なんとかスタンドに辿り着く事はできた。が、しかし、ガソリンをセルフで給油するという行為を成し遂げる事ができず、明るい照明がスポットライトになったかのような舞台上で、私は失禁してしまったのだ。尿意の我慢には、私の場合、性的な興奮がつきまとう。利尿剤の効果が切れる前に訪れた二回目の尿意、それを開放する場所に選んだコンビニエンスストア、そこで私は着衣のまま便座に腰掛け、クリト

リスを擦り上げながら放尿し、登り詰め、果てたのだった。

——この日の日記は、数ページにも及ぶ力作だった。普段は数行しか書かないのに。これがなければ、わざわざ本棚の奥に隠すような事もせずに済んだかもしれない。

性欲や尿欲の波が高まると、この時の自分が帰ってくる。克明に記された手記を目で追いながら、自分を昂らせていく。

股間が疼く。触りたくて切ない。もう、耐えられない。火照りが身体の中から外へと伝導し、全身がかつかと燃えるようだ。

あのスリルと、最後の最後まで耐えきった後にだけ訪れる、心と尿道口をこじ開けて迸り出る奔流。目眩く快感。私はそれらを忘れることができず、同じ位、いや、それ以上の体験をしたいと切望していた。

明日は休日だし、葉、使っちゃおうかな。

あのとときの自分を他人に見立てて追体験をしようと思い、葉を使う事はしばしばあった。葉を飲んだ状態で、夜の公園を徘徊し、尿意の赴くまま、下着も下ろさず出口を緩めた事もある。

それでも、過去を超える素晴らしい体験はできなかった。漏らしたその場で股間を擦って迎える絶頂は一時しのぎの火消しとしては有効だったし、気持ちがよくない訳がないのだが、破滅的な快感は得られなかった。

私は自分の気持ちを後押しさせるべく、コップ一杯の水で葉を喉の奥へと流し込んだ。

もう、後へは引けない戻れない。脳内のスイッチが、かちつと音

を立ててONになるのを感じた。

さてと……。

今夜のプランを考える。

あの時と同じように、葉の効果が頂点に達する頃に、目的地に着くのがいい。途中、漏らしたら人目につく、公共の交通機関を使うと良さそう。万が一我慢ができなければ、見られるがまま、開放してしまう事になってしまいかも知れない。おどましくも、甘美な放尿……。きつと気付かれてしまいうだろう。私は脳内にばちばちと火花が飛び散る感覚を味わった。

それから……。

アダルトグッズ店に行つて、最後の高みまで私を連れて行つてくれる玩具を物色しようか。悶絶するような尿意に翻弄されながら。そして、もうこれ以上は耐えられないと思つた所で、商品をレジカウンターまで持っていくのは？

コートを羽織り、その中にはブレイ用のコスチュームを着て、堂々と玩具を見て回ろうかな。考えただけでゾクゾクする。実行してしまおう。妄想だけで濡れるのに、これに抗う事が難しい尿意がプラスされるのだから、たまらないだろうな……。

——続きは製品版でお楽しみください！

——おしっこを出すか、出さないか。

最終的な判断は、自分が下す。自らの意思で、股間を濡らす。そんなおしっこ性癖を持った女性達にスポットを当てた、短編集。

着衣放尿の気持ちよさの虜になった時、背徳の甘い蜜を、思う存分吸れるのです。

甘い蜜は媚薬でもあり、身体を熱く火照らせる事になるでしょう。それを鎮めるための行為はひときわ甘美です。もう、逃げられません。

新しい扉は、いつでも開けるように、あなたを待ち続けています。もう戻っては来られないかも知れない、そんな扉が、目の前に。